

宛名あてなの現章げんしょう (正ただしくは玩章がんしょう)は西春にしはるち近村かむらあかぎ赤木うらのの浦野鶴松つるまつで明治めいじ四十一年よんじゅういちねんに七十六歳ななじゅうろくさいで歿ぼつした人。この書簡しよかんは前まえの五声宛ごせいあてのと同時どうじに書いたものではななかろうか。「此度このたび御文通ごぶんつうも申上もうしあげ」とあり字体じたいも同時どうじらしく酷似こくじして居る。(嗣あとつぎう 卯太郎たろうしぞう氏藏)

嚴暑げんしょの節せつ、益ますます 御励勤ごれいきん且御風雅かつごふうがの旨むね、珍喜ちんき不斜ななめ 奉ならず 寿ことほぎ □。 {ここまであいさつ文。}

陳者のぶ其後れぼは打絶そのち御疎音うちたえ申ご 何共そいん多罪もうし、折々なんとも御伝声たざいも相窺おり へども、活計おりに道ごを失でんせいひ住居不定あいうかの境遇がえ、ここ一～二年は下牧かつけいへも行っておらず、

【その後しあわせは疎遠このいちになってしまい、なんとしよまきも申し訳ありませでむきん。折々もうさずあなたからのご伝言は聞いておりましたが、生計しあわせの道このいちを失しよまきひ住居不定でむきの境遇、ここ一～二年は下牧へも行っておらず、】{「仕合」は、めぐりあわせ・境遇のことだろう。「下牧」は、芭蕉堂を建てるための土地を寄進してもいいと言ってくれた五声の所。}

夫と申それも不もうす如意勝ふにに而よ、世て上せ 追々じょう不融通おと相成ふ、今日あの露命いなりも無覚束きょう、彼是ろ取紛めいれ何おぼ 茂様つかになく

【それと申かれしますもの、思これうようにならずに世の中がだんだん暮らしづらいくなり、今日いの命ずれもおぼつかず、いろいもろにまぎれて、どちら様にもさまご無沙汰いになり、】{「世上追々不融通」は、明治になって戸籍・地租などの制度ができ、井月にとって暮らしづらい世の中になった、という意味か。}

不ふ 濟さい 次第だいと存ぞん じ候そう へども、万ばん 事じ 時とき に外はず れ 季き に後お れ 候そう て、元が 来ん 短らん 才さい 無む 能のう の拙せつ 義ぎ、此この 節せつ の有あり さま

【借金ただがたまり放題ぼうぜんになっていることは存じておりますが、すべて時機を逸してしまい、もともと無能な私のことですから、このようなありさまになって、ただ茫然としています。】{「不濟」は、支払いが済んでいない借金のことであろう。}

乍しか 併し 一な 先は 憤ふん 発ぱつ いたし 候そう 而ろう、古ふる 郷さと へ藉せき を取とり に行ゆき、秋あき 過すぎ には遅お くとも罷ま 帰かり、下しも 牧まき におい めて草そう 庵あん

開基仕度宿願に御座候。

【しかしながら、ひとまず奮起して、故郷へ戸籍を取りに行き、秋を過ぎたころには帰ってきて、下牧に草庵（＝芭蕉堂）を開くのが、私の宿願です。】

何を申も○が先に立、咄しが後れ、遂々延引ニ相成、貴君様えも段々御配意を相懸不濟次第ニ

付、此度は五声君に預ケ置候勸化帳の内、金高の(?)分、利足等勘定に廻し候へば、余程

ニ可有之候間、右一勘定御願申、右の内何程か借用いたし候而、諸方無坳分へ少

々宛も分散いたし、

【しかし先立つものが無くて、建設計画が遅れ、ついに延期になり、あなたにも御迷惑をかけ、支払いがたまっているので、今回、五声君のところに預けてある勸進帳（＝寄付金の帳面）の利息などを計算すれば、かなりあるでしょうから計算していただき、そこからいくらか借用して、あちこちに支払いをし、】{お金のことを○の伏せ字でほのめかしている。}

何れ帰杖迄は、下牧に而も御世話人第一の事故、万事御頼申置候心得ニ御坐候而、此度

御文通も申上置候間、猶貴君ニも宜御含み被下候而、今暫く御勘弁の程、伏而奉願

上候。

【いずれ（故郷で戸籍をもらって）帰ってきますので、そのときまでは、下牧のお世話人（＝五声）を第一にと考えていますので、すべてお頼みしようと手紙も送ってあります。なお、あなたにもこのことを御了解いただき、今しばらくご勘弁のほど、伏してお願いいたします。】

先日は余り御無音ニ相成候間、暑中伺旁申訳迄呈寸楮候。書外期拝眉万謝可申述

候。恐々頓首。

【あまりにごぶさたしていますが、暑中見舞いを兼ねて、お手紙を差し上げました。ここに書ききれなかったことは、お目にかかったときに述べさせていただきます。】{「寸楮」は短い手紙のこと。}

暑中 井月拝

現章雅兄 玉机下

秋も未だ暑し裏の戸表の戸

香に誇る私 はなし鳳仙花

あさがお いのち そのひ そのひ  
朝兎の命は其日くかな

もうしいでそうろう ごしょうひょうなしくだされたくそうろう  
など申出候。御笑評被成下度候。

{俳句を三つほど書き並べて、批評してほしいと言っている。}